

リポート Report

大磯町郷土資料館だより
2016・2・26

36

目次

- 2 | 歴史講座「大磯と空襲」を開催しました
- 7 | 明治の記憶 ～知られざる英雄・後藤 潤～
- 8 | 用田村伊東宗兵衛家文書「兵法記」の原文を探る／
郷土資料館展示リニューアルに伴う臨時休館について

歴史講座「大磯と空襲」

日時：平成27年8月2日（日）午後2時～4時

場所：大磯町郷土資料館 研修室

定員：60名（申し込み不要、先着順）

※定員を超えた場合は、立ち見となりますので、ご了承ください。

昭和20年7月16日の平塚空襲では、隣接する大磯町でも山王町、美屋町、寺坂などに焼夷弾が落とされ、住民が命を失いました。身近な地域で起こった空襲被害を考えるために、空襲を体験された方や、関係の調査を行っている方から、お話をききます。

- 平塚空襲について
渡邊良子さん（平塚の空襲と戦災を記録する会）
- 大磯町内から出土した焼夷弾
鈴木一男さん（大磯町郷土資料館学芸員）
- 大磯で空襲を体験して
矢橋貞子さん、渡邊栄一郎さん
- 空襲に関する炎の証言の朗読
室紘子さん（平塚の空襲と戦災を記録する会）

※タイトル、内容は一部変更になることがあります。

主催：大磯町郷土資料館

〒251-0095 大磯町豊小環445-1

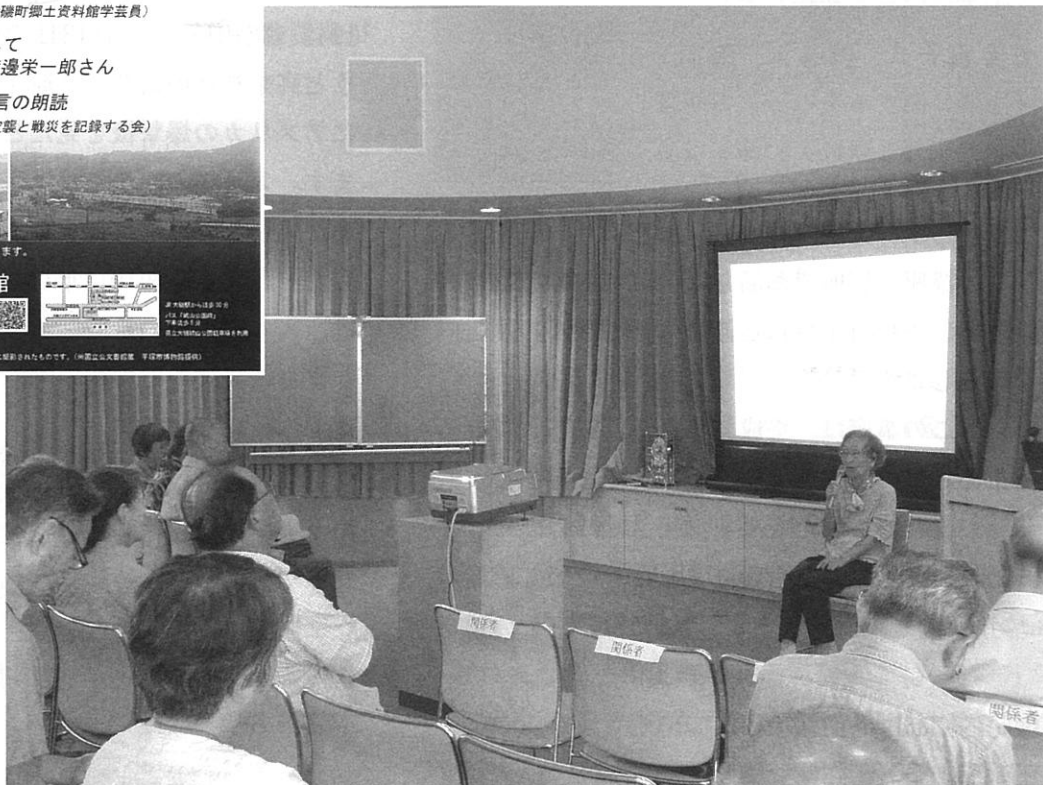
電話：0462(81)4700 FAX:0462(81)4663

協賛：大磯町政策総務部総務課

※掲載に使用した写真等は、権利20年5月29日の著作権法改正に準拠されたものです。（©郷土文化研究会 平塚市郷土館提供）

歴史講座「大磯と空襲」

を開催しました



(上) 歴史講座のチラシ / (下) 歴史講座の様子

郷土資料館では、戦後70年を迎えるにあたり、平成27年8月2日に歴史講座「大磯と空襲」を開催しました。大磯町周辺では、平塚市で大きな空襲があったことがよく知られていますが、平塚が被害を受けた同じ空襲で、現在の大磯町内にも焼夷弾などが落とされたことは、あまりよく知られていないかもしれません。太平洋戦争の時、大磯町も空からの攻撃にさらされ、尊い命が失われました。戦後70年が経った今、その事実を忘れないために、大磯町で空襲を体験された方や、空襲の聞き取りを行うなどの調査をされている方をお招きして、講座を開催しました。

歴史講座「大磯と空襲」概要

開催日時：平成27年8月2日（日）午後2～4時

場所：大磯町郷土資料館 研修室

内容：

「平塚空襲について」

平塚の空襲と戦災を記録する会：渡邊 良子 氏

「遺跡から出土する焼夷弾」

大磯町郷土資料館学芸員：鈴木 一男 氏

「大磯で空襲を体験して」

矢橋 貞子 氏、渡邊 栄一郎 氏

「空襲に関する炎の証言の朗読」

平塚の空襲と戦災を記録する会：室 紘子 氏

『レポート—大磯町郷土資料館だより—』36号では、この講座の冒頭でお話した大磯町内の空襲被害の概要と、矢橋貞子さんと渡邊栄一郎さんの証言内容を収録します。

なお、この講座は、平成元年から活動されている平塚市博物館の「平塚の空襲と戦災を記録する会」の皆様がまとめられた成果を活用させていただき、多くのご助言とご協力を賜りました。改めて感謝申し上げます。

大磯町内における空襲被害について

富田 三紗子（当館学芸員）

背景

現在の大磯町内が空襲を受けた時、日本はアメリ

カなどの連合国と長期にわたる戦争を行っていました。当時の状況を時系列にまとめると、1937（昭和12）年7月に日中戦争が勃発し、日本は中国と戦争を始めます。戦況が長引く中、国内では1938（昭和13）年5月に国家総動員法を施行、1939（昭和14）年7月には国民徴用令が施行され、国民が一丸となって戦争に立ち向かう社会へとなっていました。

世界の状況を見ますと、1939年9月にドイツがポーランドに侵攻したことをきっかけとして、ソビエト連邦、イギリス、フランスが相次いで宣戦布告し、ヨーロッパ全土が戦争を始めました。1941（昭和16）年12月、日本がアメリカに宣戦布告し、太平洋戦争が始まったことによって、戦争は世界中に広がりました。後に第二次世界大戦と呼ばれる大戦が始まりました。

第二次世界大戦は、第一次世界大戦に引き続き、殺傷能力の高い兵器が生み出され、多くの人々が命を落としました。攻撃の一つとして生み出された、飛行機から爆弾を落として地上を攻撃する空爆、空襲も、近代戦争が生み出した脅威と言えます。太平洋戦争下において、日本が初めて空襲を受けたのは、1942（昭和17）年4月18日でした。大磯では、ちょうど高来神社の祭礼（高麗寺祭）が行われ、この時にアメリカの爆撃機を見たという証言が残されています。太平洋の諸島で日本が敗戦を重ね、サイパン島が陥落して以降、日本本土への空襲は本格化しました。1944（昭和19）年11月には、東京が空襲を受け、人々は空襲の脅威を意識するようになりました。

また、大磯などの相模湾沿岸の地域は、戦況が悪化するに従って、アメリカの本土上陸作戦（コロネット作戦）に対抗するため、日本軍が陣地を築き始めるようになります。終戦間近の1945（昭和20）年春頃からは、大磯に住む人々は、アメリカ軍の上陸や空襲に、不安な日々を過ごしていたことでしょう。このような背景がある中で、1945年7月16日に平塚空襲がありました。

大磯町民が見た戦争

太平洋戦争中の大磯の様子を描いた絵が、当館に保管されています。当時、大磯に住んでいた方が後

に描いた絵ですが、上に述べた大磯の様子を表しているため、一部を紹介します。

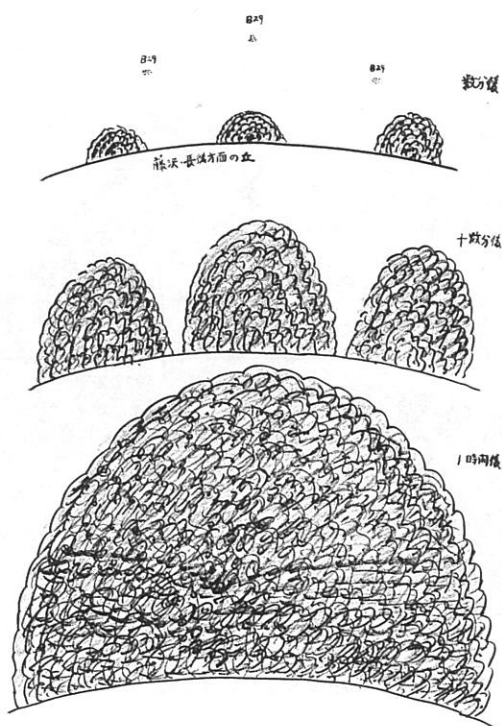
①



この絵は、1942年夏の大磯上空の様子を描いた絵です。ここに描かれている飛行機は、日本軍の戦闘機、零戦です。太平洋戦争が始まってまだ間もない頃、この当時は、日本の上空には日本軍の戦闘機が見えました。

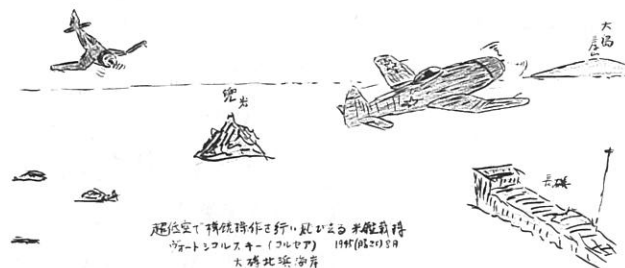
②

1945(昭和20)年5月29日 横浜大空襲を遠望



この絵は、1945年5月29日の横浜空襲の様子を描いた絵です。上空にアメリカ軍の爆撃機B29が点のように描かれ、その下に煙が上がっています。「十数分後」、「1時間後」と時間が経つにつれ、巨大な煙の塊ができた様子がわかります。恐らく、大磯から見られた状況だと考えられます。

③



最後に紹介する絵は、1945年8月の大磯北浜海岸の様子を描いた絵です。真ん中に描かれている岩は、兜岩です。「超低空で機銃掃射を行い飛び去る米艦載機」とあり、終戦直前には、大磯周辺がアメリカ軍の機銃掃射の攻撃にさらされていたことがわかります。

太平洋戦争中の大磯を知る記録として、一部ですが、当時の様子を描いた絵を紹介しました。戦況の変化によって、身近な状況が変わっていく様子をとらえることができる貴重な記録だと思います。

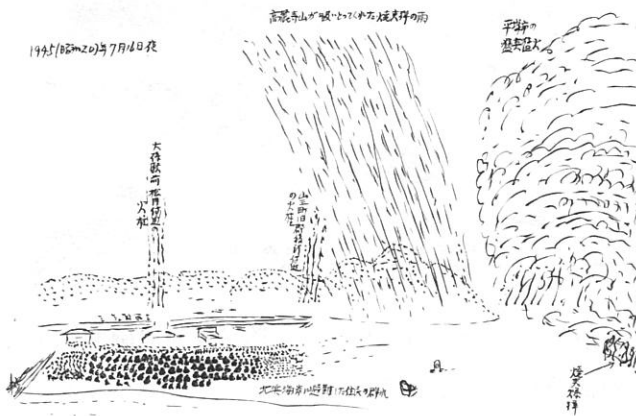
大磯における空襲被害

大磯における空襲は、記録に残っている限りでは、平塚市街の空襲と同時に行われたようです。恐らく、アメリカ軍が平塚に向けて爆撃機を飛ばし、周辺の地域として現在の大磯町内が攻撃の対象となったことが推測されます。

大きな被害は、1945年7月16日の平塚空襲の時です。この時、山王町や長者町付近、大磯駅や茶屋町付近、白岩神社付近、寺坂付近に焼夷弾などが落とされました。山王町や長者町付近では4名の方が亡くなり、6軒が焼失、大磯駅や茶屋町付近では飲食店の「松月」など5軒が焼失し、駅に停車していた車両も焼失しました。白岩神社付近では、何らかの落下物(焼夷弾など、どの爆弾かは不明)があり、家屋が半焼しました。そして、特に被害が大きかった

た寺坂付近では、4名の方が亡くなり、全焼27軒（記録によって数値に相違あり）、半焼2軒という被害がありました。記録に残されている限り、大磯での大きな空襲被害は、この時のものです。

この空襲の様子を、先に紹介した太平洋戦争中の大磯の様子を描いた方が、同じように絵に描かれています。



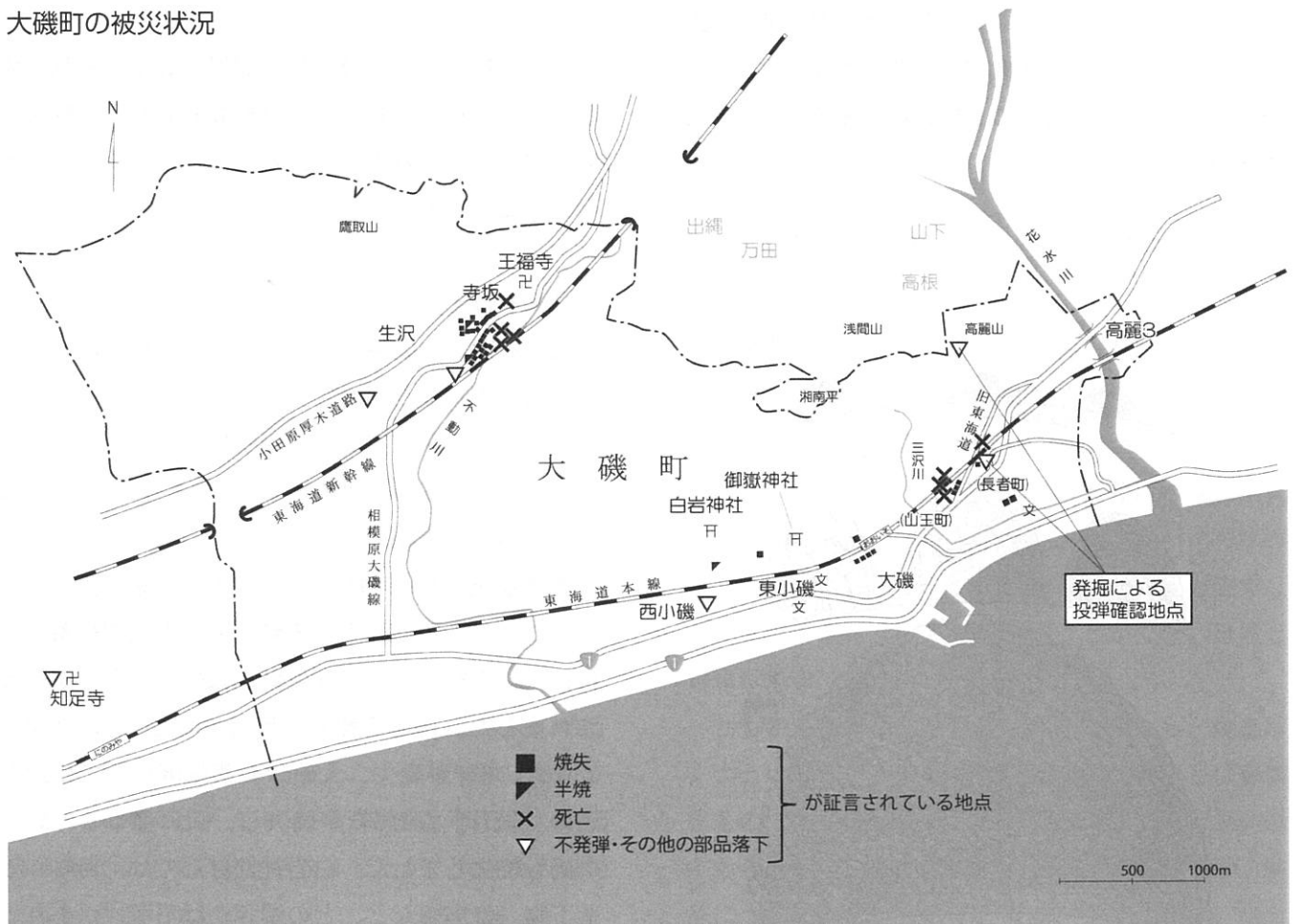
海岸側から町を見た構図になっていて、向かって

左側に空襲を受けた平塚の猛火が描かれています。また、海岸には避難した多くの町民が描かれています。大磯町内から立ち上る火柱は、焼夷弾などが落とされた大磯駅付近と山王町付近のもので、そして、「高麗山が吸い取ってくれた焼夷弾の雨」とあるように、大磯丘陵に多くの焼夷弾が落とされたことがわかります。

この空襲の半月後、7月30日には、大磯駅が空襲を受けました。この日も、平塚で空襲があり、その関係でアメリカ軍が周辺を攻撃したと考えられます。当時、アメリカ軍は、物資輸送を断つために、駅や鉄道を攻撃対象としていました。大磯駅が攻撃された理由は、このこともあったのでしょう。大磯駅は機銃掃射を受け、小型爆弾が投下された結果、駅職員が3名亡くなりました。

このほど、平成元年から活動されている平塚市博物館の「平塚の空襲と戦災を記録する会」が、『市民が探る平塚空襲 通史編1 平塚空襲の実相』を

大磯町の被災状況



『市民が探る平塚空襲 通史編1 平塚空襲の実相』 p.171より転載

発刊されました。この文献の中に、大磯町の被災状況を記した詳細な地図がありますので、前ページに転載します。

大磯町内の空襲被害はまだ明らかになっていないことが多くあります。わずか70年前に起こったことですが、空襲の記録はほとんど残っておらず、証言などから断片的な情報をつなぎ合わせるほかありません。70年が経ち、記憶が失われていくと言われる一方、今、また新たに語られることもあるかと思えます。今後とも、丹念に情報を蓄積していく必要性を認識しました。もし、何か情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、当館までご連絡いただければ幸いです。

主な参考文献

- ・平塚の空襲と戦災を記録する会編『市民が探る平塚空襲 通史編1 平塚空襲の実相』平塚市博物館、2015年
- ・大磯町編『おおいその歴史』大磯町、2009年
- ・大磯町編『大磯町史』7通史編近現代、大磯町、2008年
- ・平塚の空襲と戦災を記録する会編『市民が探る平塚空襲 証言編』平塚市博物館、1998年

大磯で空襲を体験して①

矢橋 貞子 氏 (当時12歳、西小磯)



夜、平塚が焼けた時、私は川のわりと近いところに住んでいたのですが、平塚の方が真っ赤に焼けてきたわけです。それで、もう大変だなあと思っている時、家に父親は兵隊に行っていないませんでした。母親とそれから、おばあちゃんが二人でいて、もし焼けてきてしまったら困るから、何でもいから逃

げちゃえと、何も他のことを考えないで逃げちゃったんです。

こちらにおばあさんを引っ張って来て、隣のおばあさんを連れて、二人両方を連れて、一生懸命逃げました。母親はその時に連れられなかったたんでしょね、もう少し見ているからといって、出ませんでした。その時に真っ赤に焼けたのを見て、それが何軒でしょうかね。今でも赤く焼けていた様子がよく思い出されるんです。

逃げちゃって、何も家の中は開けっ放し、何も見ないで夢中で引っ張って逃げました。帰って来てから、朝になって、戻って来た時に家を見たら、真ん中に、こんな瓦礫って言うんでしょうかね、何かボタンと落ちていました。家にいたら、それがぶつかったかもしれないし、後で、ああ、と思ったんですけども、そんな様子で戻ってきたわけです。

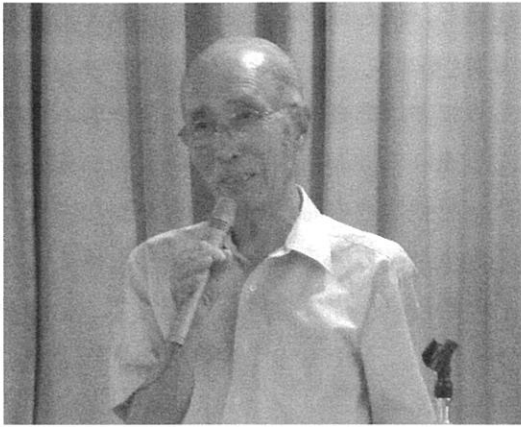
白岩さんの傍の井上さんという家に焼夷弾が落ちて、燃え出しました。それが、ずっと南の方に燃え出したものですから、これも大変でした。

もう逃げる時は何も考えません。考えないんです。もう自分が生きている、生きるということで、逃げちゃう。そういうことだけだったように思います。

焼けているのを見ているということは大変で、何とも言えない辛さと、どうしたらいいんだろう…。それで、お水を持って、バケツで消そうと思ってもそんなことができるほど、水を持ってませんでした。ちょうど女学校1年生でしたから、今の中学1年生ぐらいですね。そのぐらいに、そういうことを経験しました。後は空襲、空襲、空襲、空襲って、警戒警報、警戒警報、それだけがやられて大変。もう何も言えず。ただ、父親がいないから、おばあちゃんを大事にしなくちゃいけないということだけで、一生懸命逃げちゃったの。戻って来てから片付けたり、そんなことをしたようなことを今でも覚えています。

大磯で空襲を体験して②

渡邊 栄一郎 氏 (当時9歳、大磯)



私は山王町に住んで居りまして、大磯小学校（当時は国民学校）3年生の時でした。大磯で空襲を体験した記憶は、今でもかなり鮮明に覚えています。

昭和20年7月16日夜半から17日未明にかけての平塚空襲には、『市民が語る平塚空襲 証言編』によると、132機の攻撃機（B29）の他、レーダー対策機（RCM機、電波妨害機）4機、風程観測機（風により目標をはずれる攻撃機を誘導した観測機）1機、大型救助機1機が参加したそうです。

先に平塚が空襲を受けて、空が真っ赤で真昼のような明るさでした。大磯の空襲は、その後の午後11時30分過ぎ頃、西の方からまず飛行機の爆音が聞こえ、今でも耳に残っています。次に花水の河口付近だと思いますが、照明弾が落とされ、夜空が一面に明るくなり、キラキラ光るアルミ箔のテープ（電波妨害のためのテープ）が舞い降りて来ました。

次に、攻撃機（B29）が編隊を組んで7～8機が平塚方向に向かって飛行していくという状況を見ていました。同時に、湘南平（千畳敷）の高射砲の発射音。B29を砲撃するのですが、なかなか思うが聞こえ、ようには命中しないという感じでした。

只今、矢橋さんがおっしゃったように、午後11時30分頃、白岩神社付近、次に大磯駅周辺、山王町旧道沿い、現在の東町（当時は長者林と呼んでいた）に焼夷弾が投下され、火災が発生し、午後12時頃、平塚周辺を旋回して来たB29が国府村（当時）の寺坂地区に焼夷弾を投下しました。寺坂では20数軒が焼失し、4名が亡くなり、1名が負傷しました。焼夷弾は大磯町全域に投下されましたが、大きな火災発生は5ヶ所でした。

駅周辺をお話しますと、駅の海側が、JR沿いの

道は大磯小学校に向かって、松月さん、三引屋さん、その間に間宮さん、次に本願寺さんの別院（布教所）、現在の和和興業（プロパンガス）さん付近、駅の山側に加藤さん（加藤正治、中央大学初代総長）の別荘があって、5軒が焼失しました。でも、死傷者は出ませんでした。この近くの同級生に聞いてみますと、多くの方が現在の大磯中学校付近の松林の中に避難されたと聞いております。

次に、山王町旧道と国道1号線の山王町交差点を平塚に向かって左折、旧道と交わった北側のところが被害を受け、石田さん、下田さん、菊地さんの3軒が焼失しました。石田さんではご主人が出征していて、奥様とご長男、その下に3人の幼い子どもさんがいらっしゃったのですが、組長だった石田さんの奥様にご長男を連れて組内に警戒警報発令と連呼して伝えている時に焼夷弾が落ち、家の中にいた3人の幼い子どもさんが亡くなったと聞いております。

旧道を東に向かって現在の地下道（元、大踏切と呼んでいた）の近くの笹尾さんとその先の小川さん宅に焼夷弾が落ち、笹尾さん宅は焼失しました。小川さんの家は火災には至りませんでした。焼夷弾がお母さんの腰に当たり、亡くなられました。山王町では4名が亡くなりました。また、東町では2軒の別荘が焼失しました。

実は私の家の母屋と倉庫の間の砂地のところにM47焼夷弾が落ち、深さ2.5mぐらい、直径3～4mの穴があきました。土地が砂地であったため、砂を吹き上げ、周辺の砂が崩れて自然消火しましたが、飛び散った油脂が木造の倉庫にふりかかり、発火し、当時用意してあった防火用水の水と井戸水等で消火に当たりました。竹の先に荒縄をつけたハタキ状の火たたきを水に浸して、はたき消すという方法で。メラメラと燃え上がる火を消すことができ、母屋と倉庫は無事でした。

ともかく当時は木造住宅が大半ですから、焼き尽くすということが焼夷弾の威力です。戦争とは悲惨なものです。改めて考えなければいけないと思います。今、いろいろと問題があがっている時です。戦争について、次世代の子ども達、孫達に語り、伝え続けて行くことが必要であると思います。

明治の記憶 ～知られざる英雄・後藤 潤～

平成6年（1994）、ハワイ島ホノアカに、第1回ハワイ官約移民として渡航した後藤潤（ごとうかつ）を顕彰する記念碑が建てられた。明治時代を迎えた当時の日本は、急激な近代化によって農村を中心に経済が行き詰まり多くの人々が海外に職を求めた。ハワイと日本の中で結ばれた移民協約に基づき、契約労働者として政府が斡旋した移民は官約移民と呼ばれ、明治18年（1885）に第1回ハワイ官約移民として944人が渡航した。その多くが山口県を中心とした西日本出身者であったが、大磯からも渡航した人物がいた。それが国府村出身の後藤潤であった。

潤は寺坂の小早川伊右衛門・サヨ夫妻の嫡子として文久元年（1861）に生まれた。その後、生沢の後藤増五郎・ハル夫妻の養子となり後藤姓を名乗る。明治18年の最初の官約移民として家族とともに渡航、ハワイ島ホノアカのサトウキビ農園で3年間働き、自らの店を開業した。英語に堪能であった潤は、奴隷同然の厳しい労働環境を改善するために移民労働者と農場主との争議交渉に奔走した。移民たちのリーダー的存在として信頼を得ていた一方で、農場主や白人の商人たちの反感を買い、農園火災の事件に巻き込まれて殺害されてしまうのである。この事実は長らく人々の記憶から消されていたが、70年後の昭和41年（1966）に日系人たちが潤の墓を改築して復権を果たした。更に昭和60年（1985）の官約移民渡航100周年において追悼式典が催され、平成6年の記念碑建立へとつながるのである。そして、日系移民たちの記憶のみならず、労働運動のパイオニア的存在として歴史的な位置付けがなされていく。とりわけ潤の顕彰にあたり尽力したのは、潤の実弟である小早川関次郎の養女・嘉屋文子であった。日系移民の史実を紐解いた嘉屋は、後に私財を投じて「嘉屋日米交流基金」を設立。ハワイの学生を日本に招くなど日米学生の交流に尽くした。嘉屋は平成16年（2004）に亡くなるが、その後も国内外の研究者が引継ぎ、ハワイにおける多文化共生の象徴として潤の存在が語られている。

一方、出身地である大磯町においては、潤の存在

はほとんど知られていない。かつて、筆者は民俗調査の聞き取りの際、ハワイ移民の先がけの方が存在した情報は得ていたが、それ以上の調査は実施していない。昨年、町内在住の研究者・加藤喜規氏のご教示を受け、あらためて確認調査を始めたところである。幸いにも、潤・関次郎ご兄弟の縁者にお話をお聞きすることができた。残念ながら地元に残されている資料は少ないが、ハワイで没したはずの潤の墓碑が町内に残されていたことは驚きであった。墓碑は小早川潤の名で刻まれており、碑裏の銘文からは、潤は6人兄弟の長男として生まれ、幼少からたいへん優秀であったこと。大住洵綾郡署や神奈川県庁で働き、官約移民の監督者としてハワイに渡航したこと。その後、職を辞して商業に専従したことなどが記されている。明治24年（1891）、実父によって建てられたこの墓碑からは、夢を抱いて渡航した潤への慈しみ、志半ばで潰えた悼み、そして何よりも移民労働者たちの声を訴え続けた勇気を称える思いがひしひしと伝わってくる。

それは碑文の最後に「彼の身体は滅しても、その名は残るであろう」という一節で結ばれていることからもうかがわれる。



小早川潤墓碑

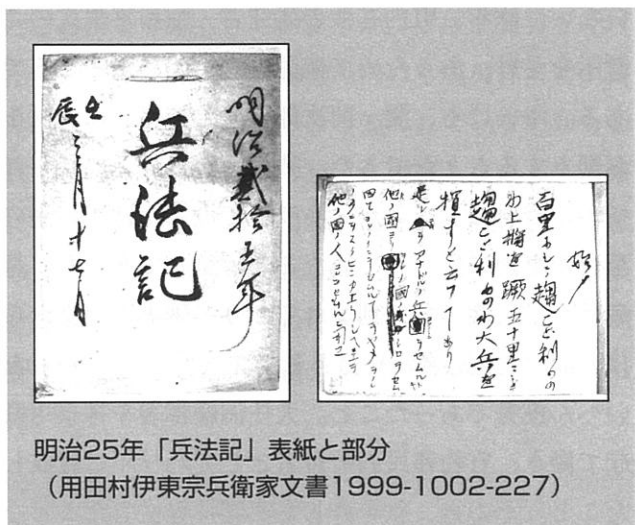
ハワイでは、後藤潤の足跡を辿る作業が続けられている。既に映像化の企画も進行していると聞く。大磯町にとっても記憶に留めておかなければならない重要な史実のひとつと言えよう。

参考・引用文献

- ・ 嘉屋文子「後藤潤のこと」溪水社、1986年
- ・ 堀江里香「後藤潤リンチ事件と記念碑—ハワイ日系社会黎明期の記憶の表象—」『アメリカ研究』第47号、アメリカ学会、2013年
- ・ Patsy Yuriko Iwasaki, Avery Allan Berido「Hidden Hero 知られざる英雄」2008年

（当館前館長／佐川和裕）

用田村伊東宗兵衛家文書「兵法記」の原文を探る



明治25年「兵法記」表紙と部分
(用田村伊東宗兵衛家文書1999-1002-227)

大磯町郷土資料館が所蔵する用田村伊東宗兵衛家文書には、「兵法記」という資料がある。『史記』、『戦国策』など中国の本の文章をとり、「兵法」と「兵法外」の二つにした約10ページの和綴本である。著者は伊東宗兵衛家11代宗兵衛^{すけとも}祐智で、天然理心流藤原祐智を名乗っていた。本書は覚書と見られるが、書き方に不可解な点がある。

まず、「百里にシテ^{おもむく}趨^{りする}こと利^たものわ上^た将^{おす}を蹶^す」と書いているが、『史記』の「孫子呉起列伝」では

「^{にしてりにおもむくものは}百里而趨利者」とあり、「趨^{しゆ}」と「趣^{しゆ}」はどちらも「おもむく」と読むので、「趨」にしたのかもしれない。しかし、『太平御覧^{ぎやうらん}』に載せてある『孫臏兵法^{そんびん}』には「趨利者」とあるので、こちらを読んだのだろうか。

次に、韓が魏に攻められて、齊に助けを求めた話がかかれている。『史記』や『戦国策』、『十八史略』にある話を祐智なりにまとめて、感想も書いている。

「兵法外」冒頭の「鶏口牛後」は、大きく強いものに付き従うよりは、小さいものの頭となれという意味である。秦に付こうとした韓に、蘇秦^{そしん}がこの言葉を使って韓の宣王を諫めた。『史記』の「蘇秦列伝」の中の話であるが、似た話が『戦国策』にもある。

最後は、『絵本太閤記』の「天下ヲ治ムルニ大道アリ」という一節が引用され、以下3行ほどを仮名でほぼ原文通りに写している。祐智は広く和漢の本を読んだ博学多才の人物でもあった。

(注) 韓、魏、齊、秦は、中国戦国時代の国名。

(古文書解説クラブ 外川 一實)

郷土資料館展示リニューアルに伴う臨時休館について

大磯町郷土資料館は、平成27年度から展示リニューアル工事を進めております。現在、現場工事の準備を進めており、平成28年3月下旬から、常設展示室等の展示の解体、更新工事等を行います。このため、以下の期間、休館致します。

臨時休館の期間

平成28年3月22日(火)～11月2日(水)頃

館内をご見学される皆様、研修室をご利用される皆様には、ご迷惑をお掛けしますが、何卒、ご理解の程、お願い申し上げます。

なお、休館期間は、工事の進み具合によって変更する可能性があります。変更の際は、別途お知らせ致します。